

今月のみことば 2017年7月

「わたしのほかに神はいない。わたしは殺し、また生かす。わたしは傷つけ、またいやす。」

(申命記32章39節)

神の愛の誤解



聖書と聞けば、「神は愛なり」ということばがすぐに思い浮かぶ人は少なくない。確かに、それは聖書の中に書かれていることばそのものでもある(ヨハネの手紙第一 4章16節)。

しかし、このことばに反発する人も少なくない。

「神が愛であるなら、どうして飢餓や戦争があるのか」

「神が愛であるなら、どうして不正や犯罪を直ちに止めないのか」と。

1923年9月1日、関東大震災が発生。関東一円は一瞬のうちに壊滅し、無数の家屋や建物が倒壊した。東京帝大を首席で卒業し、官僚としてエリート道を歩み、ドイツ留学を目前にしていた塚本虎二の家も例外ではなかった。しかも最愛の妻は建物の下敷きとなって短い生涯を終えた。

すでにクリスチャンとなっていた塚本であったが、あまりに突然起こった悲劇にことばを失った。そして、神に「なぜ」と問いかけた。すると、「ホティ・ホ・セオス・アガペー・エスティン(なぜなら神は愛だからである)」という聖書の言葉が迫ってきた。生涯に何度か聞いた神の声の一つであった。それで立ち直ることができたのである。

「神は愛するがゆえに掻き裂き、愛するが故にまた包み給う。否、癒さんとして掻き裂き、包まんとして傷つけ給う。私達罪の人間はこの神の愛の矛盾の坩堝(るつぼ)において精錬されることなしには神の国に入ることが出来ない」と塚本は言う。そして、官僚をやめ、伝道者としての生涯を歩み、聖書研究に著しい功績を残したのであった。

「神の愛」とは真珠のように尊い真理である。しかし、その愛を誤解し、自分の願いを神に叶えてもらえ、と思いき、結果がそれに反すると神に対して怒る人は少なくない。かのニーチェの場合も、最愛の父と弟を、あり得ない事故や病気で失った経験が、「神は死んだ」という、後の哲学思想につながっている。

イエス・キリストは「豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから」と言われた(マタイの福音書 7章6節)。

食べ物だと思ってほおぼしたら、固くて食べられないもの(真珠)だったために、野生の豚は怒って立ち向かってくる。これはまさに、私たちが神に対してとる態度そのものである。

しかし、神の愛とは、尊い真珠(聖書の時代において最も高価な宝石)である。神の愛とこの世の艱難辛苦は矛盾しない。なぜなら神は私たちが愛すればこそ、私たちが厳しく鍛えられるからである。

